福岡県公立高校入試問題

二〇一九年度

五〇分
六〇点

一　次は、太郎さんが【ノーベル賞に関するホームページ】を見て、本庶佑（ほんじょたすく）さんのことを話題にしながら、祖母と話をしている場面である。これらを読んで、後の各問に答えよ。

【ノーベル賞に関するホームページ】

ノーベル医学・生理学賞の受賞者に，京都大学特別教授の本庶佑さんが選ばれました。本庶さんは，免疫の働きを抑えるブレーキ役となる物質を発見し，がんに対して免疫が働くようにする新たな治療薬の開発などに貢献しました。

（NHK NEWS WEB「まるわかり　ノーベル賞　2018」による。写真は，文部科学省　平成25年度文化勲章受章者ページによる。一部改変）

太郎さん：本庶さんは，研究に没頭して素晴らしい功績を残されたんだね。難しい研究をしている多くの人に［　ア　］を与える受賞になったんじゃないかな。

祖母：そうだね。特に医療の分野において，新たな［　ア　］の光が差してきたといえるね。

問一　没頭の漢字の読みを、平仮名で書け。

問二　働きの品詞と、次の1～4の――線を施した語の品詞が同じものを一つ選び、その番号を書け。

1　その人に初めて会ったのは、小学生のときだった。
2　彼女は、とても気さくな人なので、話しやすい。
3　元気でいてくれることが、なによりの喜びである。
4　壁に飾られている絵画から、温かみが感じられる。

問三　貢献の類義語として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　介入　2　寄与　3　躍動　4　直結

問四　ア には、「将来への明るい見通し」という意味の語句が入る。その語句を漢字二字で、楷書で書け。

問五　開発の「開」を楷書で書いた場合の総画数と、次の1～4の行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを一つ選び、その番号を書け。

1　翌　2　暖　3　勤　4　種

二

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

A

以前、評論家の山崎（やまざき）正和が、日本文学者のドナルド・キーンに触れつつ、興味深いことを述べていた。日本と欧米の詩歌に対する捉え方の違いである。

欧米の考えだと、詩歌は、神の啓示を受けて作られるので、詩人や作家は、あまり人づき合いせず、隠遁（いんとん）していてもよい。詩歌をはじめとする芸術は、啓示を受けた個人が生み出すという発想である。神を背負った個人が作ると想定される。

他方、キーンは驚きをもって記しているのだが、日本の伝統では、詩歌は常に、人と人との関わりのなかで生まれると考えられてきた。和歌も俳句も、歌会や句会といった社交の場で作られるのが基本である。時には、吟行という具合に野山に皆で出かけて行って、歌を詠（よ）むこともある。

場の雰囲気や感情を共有し、人と人とが関わり、お互いに批評し合うなかで、よりよき詩歌が生まれると想定されてきた。詩歌だけではなく茶道や華道にしても、日本の芸術は、社交の場で人をもてなすなかで作られるものだった。

日本と欧米のこのような相違は、芸術観の相違であると同時に、人の創造性に対する見方の違いでもある。欧米では、創造性を担うのはあくまで個人である。背景には神の啓示があったが、世俗化の進んだ現代では神はあまり意識されず、個人の独創がそれを担うという発想である。

他方、日本では、創造性が生じるのは、よき人間関係がある場である。状況を共有し、そこで生まれる感情を分かち持つ人々の相互作用のなかから新奇でユニークなものが生じるという発想である。

B

創造性についてのこうした日本的な見方は、教育心理学者も指摘している。臼井博は、日米の比較研究の結果をいくつか参照しつつ、次のように記す。

「個人主義の伝統の強いアメリカでは創造性を個人の中の特徴であると見やすいのに対して、日本ではそれをむしろ個人間に共有される特徴と見る傾向があるのではなかろうか」

「創造性の欧米的見方をビジネスの場に投影したのが、起業家重視の発想である。独創的個人である起業家が天賦の才でもってブレイ

クスルーを起こすという見方である。

　最近、日本でも、こうした見方を取り入れようとする動きが顕著である。だが、それでも日本人にとってなじみ深いのは、そして実際、多くの技術革新を過去、成し遂げてきたのは、やはり、創造性とは人と人との間に生まれるものだという見方であろう。つまり、新製品の開発など創造性が必要とされる場合、ひとまず、よき信頼関係が得られる場を作り、その場における「知の共有」「感覚の共有」を図っていく。そして皆で、忌憚（きたん）のない意見のやり取りや試行錯誤を繰り返しながら、新奇な、優れたものを生み出していくというものである。

―――――　C　―――――

　日本では、班活動、給食当番、教室の掃除、学級会、部活動などさまざまな機会を通じて、小中学校のときから他者と共同作業することの大切さが教えられる。これらは、他国ではあまり見られない日本の学校教育の特徴である。

　日本人は、学校教育の場でも、あるいはかつての日本型経営でも、他者との共同作業を重視し、皆が協調性を持ち、気持ちよく働ける場を作り出すことの重要性を強調してきた。

　これは、単に効率性向上という考慮からきているわけではない。日本人が個性を重視しない集団主義に染まっているからでもない。そうではなく、そうした場づくりが個々の人々に活力を与え、新しい発想の創造や個々の成長にもつながると半ば無意識に捉えてきたからにほかならない。

（施　光恒「本当に日本人は流されやすいのか」より。一部改変）

（注）　山崎正和…一九三四（昭和九）年生まれ。劇作家、評論家。
　　　ドナルド・キーン…一九二二（大正十一）年生まれ。日本文学研究者。
　　　啓示…あらわし示すこと。
　　　隠遁…世事をのがれて隠れること。
　　　歌会…歌人が集まって、よんだ歌を披露する会。
　　　句会…俳句を作り、発表して批評し合う会。

臼井博…一九四八（昭和二三）年生まれ。北海道教育大学名誉教授。

天賦…生まれつき。

ブレイクスルー…画期的な進歩・革新。

問一　次の表は、本文に述べられている日本と欧米の相違についてまとめたものである。［ア］～［ウ］に入る最も適当な語句を、［ア］は本文中の［A］・［B］の部分から二字で、［イ］は本文中の［A］の部分から四字で、［ウ］は本文中の［C］の部分から六字でそのまま抜き出して書け。

		欧米	日本
［A］	芸術（詩歌）に対する捉え方	神の啓示を受けて、神を背負った［ア］が作る。人づき合いせず、隠遁していてもよい。	［イ］で人をもてなすなかで作られる。
［B］	人の創造性に対する見方	［ア］の独創が担う。	よき人間関係の場に生じる。
［C］	ビジネスの場における創造性の見方	天賦の才でブレイクスルーを起こす。	［ウ］が得られる場を作った上で、「知の共有」「感覚の共有」を図りながら、優れたものを生み出していく。

ア　□□

イ　□□□□

ウ　□□□□□□

問二　本文中の学校教育の場　かつての日本型経営に共通して見られる日本人の考え方は、どのような考え方だと書き手は述べているか。
解答欄の下の語句に続くように、六十字以上、七十字以内でまとめて書け。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□という考え方。

問三　この文章の特徴について説明した文として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　前半で歴史的な事実を述べて後半で現代の課題を指摘するという構成で事実と意見を分けて書くことで、書き手の意見を効果的に伝えている。
2　日本人のものの見方についての書き手の考えとは異なる意見を引用して相手の立場や考えを取り入れることで、書き手の考えを広げている。
3　はじめと終わりに主張を繰り返し述べることで、新たなものを生み出す際の文化的違いに対する書き手の考えを明確にしている。
4　異なる文化と比較をしたり身近なことから具体例を挙げたりすることで、日本人のものの見方に対する書き手の考えに説得力をもたせている。

□

三

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

【ここまでのあらすじ】　小学五年生の「私」（中里ひばり）と祖母の「すみれ」は、親友とも呼べるほどの大の仲良しである。ある日、親鳥がいなくなったインコの卵を見つけ、二人で大切に温めて卵をかえす。ようやく生まれたヒナに「リボン」と名付け、二人で大切にかわいがって世話をしていた。

五月になり、いよいよ待ちに待ったその日がやって来た。

リボンが誕生してから、ちょうど半年が経ったのだ。今日は、すみれちゃんとそのお祝いをすることになっている。

リボン、もうすぐだからね。

心の中からメッセージを送るようなつもりで、遠くのリボンに話しかけた。

けれど、角を曲がった瞬間、幸せな期待はあとかたもなく消え去った。すみれちゃんが、靴下のまま玄関先に倒れ込んでいたのだ。

「どうしたの！」

ハコベのブーケを握ったまま、私は全速力で駆け寄った。嫌な予感が、夕立みたいに一気に胸を支配する。

「リボンが、リボンがね……」

「どうしたの？　ねぇ、すみれちゃん、リボンがどうしたの？」

「かごの掃除をしようと、リボンを外に出してたんです。その時に電話が鳴って、わたくしがうっかり、部屋の入り口を開けてしまったものですから」

すみれちゃんは涙声になりながらも続けた。その時に、リボンが逃げてしまったのだろうか。でも私は内心、リボンが大けがをしたとか、それよりもっと最悪のことを想像していたから、少しホッとしたようなところもあった。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。わたくし達の大切な宝物を……」

「大丈夫、大丈夫だよ、すみれちゃん。絶対に大丈夫だから」

私は優しくささやいた。

だってリボンは、まだちゃんと生きているのだ。生きていれば、またどこかで会えるかもしれない。それに、すぐに戻ってくるかもわからない。頭ではそう思うのに、すみれちゃんの涙がうつってしまい、私の目にまで、涙があふれた。悲しくなんてないはずなのに、①なんだかどうしようもなく切ない気持ちが、一歩ずつにじり寄って、私を動けなくする。

「ごめんなさい」

すみれちゃんが、そう言った時だ。桜の木から、黄色い鳥が飛び立った。

「リボン！」

私は、大声で呼んだ。

「おいで！　こっちだよ、戻っておいで」

リボンのいる方に向けて、精いっぱい腕を伸ばし、人差し指を差し出す。けれど、リボンは振り向かなかった。あっという間に、薄いピンクの夕暮れの雲にまぎれてしまう。

「リボン！」

もう一度、声を限りに叫んだ。

すみれちゃんが、泣いている。私の目からもまた、涙がこぼれた。リボンがあんなふうに空を羽ばたけるようになっていたなんて、これっぽっちも想像していなかった。

たった今大空へと飛び立ったリボンの後ろ姿は、まるで本物のリボンのようだった。美しくちょうちょ結びにしたみたいに、羽翼と尾翼が、きれいな末広がりになっていた。

私は蠟（ろう）人形みたいに固まって、そのまま空を見続けた。もしかすると、もしかすると②奇跡が起きるかもしれない。そう思うと、すぐには動くことができなかった。

でもやっぱり、奇跡は起きなかった。③少し肌寒い風が吹き始めたので、私は覚悟を決め、喉の奥から声を絞り出した。

「中に入ろう」

すみれちゃんの脇の下を両手で支え、立ち上がらせる。それからすみれちゃんの手をしっかりと握りしめ、玄関までの数メートルを、手をつないだままゆっくり歩いた。

リボンが宝物だったのではない。

すみれちゃんとふたりで卵をかえしたことや、まだ目の開かない頃に餌をやり続けたこと、リボンとすみれちゃんと三人で一緒に過ごした時間のすべてが、私にとっては宝物だったのだ。だから、宝物が消えたわけではない。宝物は、ずっとこの胸に残っている。

リボンに生えた立派な風切り羽は、大空を羽ばたくために神様が与えてくれたものだ。リボンは、空を飛ぶために生まれてきた。だからあれが、本当の姿だ。

家に入る前、手に持っていたハコベのブーケをそっと土の上に放った。もしかしたら、リボンがまた、戻ってきてくれるかもしれない。大好物のハコベを置いておけば、ここが中里家の目印になる。リボンが私の肩から首の裏を通って反対側の肩に移動する時のくすぐったい感触が、なぜだか突然甦（よみがえ）った。墨汁をぽとんと一滴、丸く落としたようなつぶらな瞳を思い出した。

私はもう一度、空を見上げた。

この空のどこかに、リボンは確かにいる。

リボンは、生きている。これから先も、生き続ける。

だから、今日は④リボンの門出をお祝いする日だ。リボンはきっと、空のどこからか、必ず私とすみれちゃんを見守ってくれている。

だってリボンは、私とすみれちゃんの魂を永遠につなぐリボンなのだから。

（小川　糸「リボン」より。一部改変）

（注）　ハコベ…ナデシコ科の越年草。山野・路地に自生。春、白色の花を開く。はこべら。
　　ブーケ…花束。
　　風切り羽…鳥の両翼後縁に並ぶ大形の羽。

問一　本文中の①なんだかどうしようもなく切ない気持ちが、一歩ずつにじり寄って、私を動けなくすると同じ表現技法が用いられている文として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　嫌な予感が、夕立みたいに一気に胸を支配する。
2　たった今大空へと飛び立ったリボンの後ろ姿は、まるで本物のリボンのようだった。
3　私は蠟人形みたいに固まって、そのまま空を見続けた。
4　墨汁をぽとんと一滴、丸く落としたようなつぶらな瞳を思い出した。

問二　本文中に②奇跡が起きるかもしれないとあるが、この場合の「奇跡」とは、具体的にはどのようなことか。十五字以内でまとめて書け。

問三　本文中に③少し肌寒い風が吹き始めたとあるが、この表現によってもたらされる効果について説明したものとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　季節の移り変わりを示すことで、「私」の心の成長を感じさせる効果。
2　「私」を現実に引き戻し、「私」とすみれとの関係を遠ざける効果。
3　時間の経過を表すとともに、次の行動に移るきっかけを与える効果。
4　場面の雰囲気を印象付けつつ、今後の幸せな展開を期待させる効果。

問四　本文中に④リボンの門出をお祝いするとあるが、ここで「私」は、リボンにどのような成長があったと捉えているのか。解答欄の下の語句に続くように、二十字以上、三十字以内でまとめて書け。

という成長。

問五　本文中にリボンは～生き続ける　リボンは～永遠につなぐリボンとあるが、「私」がそう確信するのは「私」のどのような思いによるものか。三十字以上、三十五字以内でまとめて書け。

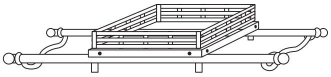
四

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

漢朝（かんてう）に孝孫（かうそん）と云（い）ふ者ありけり。年（とし）十三歳なりけるが、父、妻（め）が詞（ことば）につきて、年たけたる親を山へ送つて捨てぬ。孝孫幼（をさな）かりけれども心ある者にて、父を諫（いさ）めけれども父用ゐず。元啓と二人、手輿（たこし）に載（の）せて山へ送りて捨てて帰る。元啓この輿（こし）を持ちて返らんとす。父が云（い）はく、「持ちて帰りて何かせん」と制してければ、「父の年たけ給（たま）ひたらん時、持ちて捨てん為（ため）」と云（い）ひけるに心づきて、我（わ）れ父を捨てば、また我（われ）を学びて、我（わ）が捨てられん事を思ひて、また親を具して返りて<u>養ひけり</u>。父を諫（いさ）むる計事（はかりごと）、実（まこと）に智恵（ちゑ）深くこそ。

（「沙石集」より。一部改変）

（注）漢朝…漢の時代。
孝孫…孝行な孫。元啓のこと。
妻が詞につきて…妻の言葉に従って。
手輿…前後二人で二本の棒を腰のあたりまで持ち上げて運ぶ乗り物。



［手輿］

問一　本文中の養ひけりの読み方を、全て現代仮名遣いに直し、平仮名で書け。

問二　次の[　]の中は、本文を読んだ野口さんと松村さんと先生の会話の一部である。

先生　この話の登場人物である「元啓」は、どのような人だと思いますか。そう考える理由を含めて、ペアで話し合ってみましょう。

野口さん　元啓は、とても賢い人だと思います。それは、父が元啓の忠告を聞かず、自分の親を山に置いて帰ろうとする場面での、元啓の行動からいえると思います。言葉での忠告が受け入れられなかったので、次は行動によって自分の気持ちを伝えようと工夫した点が、賢いといえます。

松村さん　なるほど。私も賢い人だと思った点は同じですが、野口さんは行動に注目したのですね。私は、違うところに注目しました。[A]の「父の年たけ給ひたらん時、持ちて捨てん為」という言葉です。この言葉を聞いて、「私が父を置いて帰ったら、（　　　）」ということに気付かされ、親を連れて帰ったのです。だから、この言葉に賢さが表れていると思いました。

野口さん　そうか。行動も言葉も、「[B]」だったのですね。やはり元啓はとても賢い人だといえますね。

先生　二人とも、しっかりと内容を読み取ることができましたね。

(1)　[　]の中の元啓の行動を含む一文を、本文中からそのまま抜き出し、その初めの三字を書け。

(2) □の中の A ・ B に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の1〜4のうちから一つ選び、その番号を書け。

1　A　元啓の父　　B　持ちて捨てん為
2　A　元啓　　B　父を諫むる計事
3　A　元啓の父　　B　父を諫むる計事
4　A　元啓　　B　持ちて捨てん為

(3) □の中の（　　）に入る内容を、本文を踏まえて、十五字以上、二十五字以内の現代語で書け。

問三　元啓が「孝孫」と呼ばれた理由を、十字以上、二十字以内の現代語で説明せよ。ただし、**父**、**祖父**という二つの語句を必ず使うこと。

五

F中学校では、毎年、F幼稚園の幼児とのふれ合い活動を行っている。次の【資料1】は中学校から配布された資料の一部、【資料2】は幼稚園から配布された資料の一部である。これらを読んで、後の問に答えよ。

【資料1】

〔幼児とのふれ合い活動〕

〈活動名〉
「秋を見つけよう」

〈目的〉
・幼児に，季節を感じるものを見つける喜びを味わってもらう。
・幼児に，身近な植物などへの関心をもってもらう。
・幼児に，友達と一緒に活動する楽しさを感じてもらう。

〈内容〉
秋を感じるものを探す。
（様々な色の木の葉，どんぐり，松ぼっくり，すすき，いちょう，コスモスなど。）

（昨年度の活動の様子）

【資料2】

〔F幼稚園の幼児について〕

・自分でできたり考えてやり遂げたりしたことを，ほめられたり認められたりすると，達成感を味わい自信をもって行動しようとする。
・自分がしていることや言ったことについて問いかけられると，自分の言葉で答えようとしたり，興味をもって行動しようとしたりする。
・生命の不思議さや尊さに気付くと，命あるものを思いやり，大切にしようとする気持ちをもって関わろうとする。

問　「秋を見つけよう」という活動を行うにあたり、グループ内で、幼児にかける言葉についての考えを述べ合うことになった。あなたならどのようなことを述べるか。次の条件1から条件4に従い、作文せよ。

条件1　文章は、二段落構成とすること。

条件2　第一段落には、「秋を見つけよう」という活動において、幼児に対して、どのような場面で、どのような言葉をかけるかを、【資料1】、【資料2】を参考にして具体的に書くこと。

条件3　第二段落には、第一段落で書いた言葉をかける理由を、【資料1】の〈目的〉、【資料2】のそれぞれから必要とする情報を取り上げ、それらと結び付けて書くこと。

条件4　題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従い、十行以上、十二行以内で書くこと。

10

〈Note〉

二〇一九年度

福岡県公立高校入試問題

一

解答

問一、ぼっとう　問二、3　問三、2　問四、希望　問五、3

解説

問二、活用のない自立語で、主語にすることができる名詞。1は、活用のない自立語で、用言を修飾する副詞。2は、活用のある自立語で、言い切りの形が「～だ」となる形容動詞。4は、活用のある自立語で、言い切りの形が「ウ段」の音で終わる動詞。

問五、十二画。1は十一画、2は十三画、4は十四画。

二

解答

問一、ア、個人　イ、社交の場　ウ、よき信頼関係　問二、他者との共同作業を重視し、皆が協調性を持ち、気持ちよく働ける場づくりが、個々の人々に活力を与え、新しい発想の創造や個々の成長にもつながる(という考え方。)(68字)　問三、4

解説

問一、ア、欧米では、「詩歌をはじめとする芸術は…神を背負った個人が作る」と考えられている。イ、日本の芸術は、「社交の場で人をもてなすなかで作られるもの」とある。ウ、日本のビジネスの場でなじみ深いのは、「ひとまず、よき信頼関係が得られる場を作り…優れたものを生み出していく」ことだと述べている。

問二、両者が「他者との共同作業を重視し…気持ちよく働ける場を作り出す」ことの重要性を強調してきたことについて、「そうした場づくりが…個々の成長にもつながると半ば無意識に捉えてきたから」と述べていることに着目する。

問三、日本を欧米と比較したり、学校における「班活動、給食当番…部活動」などの身近な例を挙げたりしていることをおさえる。

三

解答

問一、1　問二、リボンが戻ってくること。（12字）（同意可）　問三、3

問四、立派な風切り羽で、大空を羽ばたくことができるようになった（という成長。）（28字）（同意可）

問五、三人で一緒に過ごした時間が、宝物として胸の中に残っているという思い。（34字）（同意可）

解説

問一、「切ない気持ちが…私を動けなくする」「嫌な予感が…支配する」と、人間以外のものを、人間の動作で表現する擬人法が使われている。2～4は、「ような」「みたいに」などの語を用いた直喩。

問二、たった今リボンが飛び立った「空を見続けた」ことや、「でもやっぱり、奇跡は起きなかった」とあきらめてすみれちゃんと家の中へ入ろうとしていることから考える。

問三、気温が下がってきていることや、「すぐには動くことができなかった」状態から、少し肌寒い風を感じたことで、覚悟を決めて「中に入ろう」とすみれちゃんを立ち上がらせていることをおさえる。

問四、卵からかえしたリボンが「あんなふうに空を羽ばたけるようになっていたなんて…想像もしていなかった」が、飛び立ったリボンを見て「リボンに生えた立派な風切り羽は…空を飛ぶために生まれてきた。だからあれが、本当の姿だ」と思っていることに着目する。

問五、リボンを逃がしてしまったすみれちゃんは「わたくし達の大切な宝物を」と謝っていたが、大空へ飛び立ったリボンの姿を見て「リボンが宝物だったのではない…三人で一緒に過ごした時間のすべてが、私にとっては宝物だったのだ」「だから…宝物は、ずっとここの胸に残っている」と思っていることをおさえる。

四

解答

問一、やしないけり　問二、(1) 元啓こ　(2) 2　(3) 元啓もまた私のまねをし、次は私が捨てられる（21字）（同意可）

問三、父に行動を改めさせて、祖父を救ったから。（20字）（同意可）

五

解説

問一、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」を「わ・い・う・え・お」にする。

問二、(1)「次は行動によって自分の気持ちを伝えようと工夫した」とあるので、手輿を持って帰ろうとした行動をおさえる。(2)輿を持ち帰ろうとする「行動」と、「父の年たけ給ひたらん時、持ちて捨てん為」という「言葉」によって、捨てにきた親を父が連れて帰ったことから考える。(3)「私が父を置いて帰ったら」とあるので、その続きの「また我を学びて、我が捨てられん事」に気が付いたことに注目。

問三、「孝孫」とは、孝行な孫ということ。元啓が行動や言葉によって父を諫め、年老いた祖父を連れて帰らせたことをおさえる。

口語訳

漢の時代に孝孫という者がいた。年は十三歳であったが、父が妻の言葉に従って、年をとった親を山へ送って捨ててしまった。孝孫は幼かったけれども思いやりのある者であって、父を諫めたけれども父は聞かなかった。元啓と二人で、手輿に載せて山へ連れて行って捨てて帰る。元啓はこの輿を持って帰ろうとした。父は「持って帰って何をしようというのか」と制したところ、「父上が年をとりなさった時、持って捨てるためです」と言ったので（父は）気が付いて、自分が父を捨てるならば、また自分から学んで、（息子に）自分が捨てられるだろうことを思って、また親を連れて帰って養ったという。父を諫めるはかりごと、じつに智恵深いことである。

解答

（例）

　幼児が秋を感じる植物を見つけたときに、すごいね、この植物の名前を知っている？と声をかけるとよいと思う。

　自分でできたことをほめられることが幼児

の自信につながるので、秋にだけ見られる植物を幼児が見つけたときにはたくさんほめてあげたい。また名前は知っているか、植物のどの部分なのか、なぜこんな形をしているのかなど問いかけることで、植物をよく観察して興味をもってもらえると考える。そうして植物に直接ふれることで、植物を大切にすることも学んでもらえたらいいと思う。